

令和七年度
入学試験問題
解答用紙

国語

現代の国語・言語文化（近代以降の文章）
論理国語・文学国語（近代以降の文章）

第一問

a	酸
b	緻密
c	完璧
d	凝
e	妬（嫉）

物語にはつきりとした結末が用意されていて、小説家はそこに向かって緻密に文章を構築していくという考え方。

人生は練習することも理解することもできないという指摘が、自分の人生に明確な意義や目的を見出し、それに従つて生きるべきだと考えていた若い頃の筆者的价值観を揺さぶつた点。

自分の物語が問い合わせられることで、自分の記憶の中に語り残したものがあることに気付かされ、再度物語を語り直す必要が生じるから。

自分が感じたとおりに相手にもその一瞬の光景に深く共感してもらい、それを永遠の記憶としてとどめてもらうこと。

人間は自分の身の周りに起ころる物事や過去の経験などを意味のある物語として捉え、単純化して解釈しようとするということ。

友人たちの書いた日常の何気ない小説のシーンには、彼らの顔や声以上に彼らの内面や価値観など、その人となりが生々しい形で現れていたから。

人間は自分の身の周りに起ころる物事や過去の経験などを意味のある物語として捉え、単純化して解釈しようとするということ。

度 分 情 届 自 分 の
か 自 を か け た い 記
ら 身 日 ら た い 憶
理 も 常 な い と い
解 予 の い と い
し 測 何 こ い 残
よ し で と う う
う な も を 願 る
と か な 受 い 出
す つ い け を 来
る た 物 入 も 事
営 人 語 れ ち や
み 生 と な 、 感
だ の し が た 情 を
と 意 言 、 一 度 み
捉 や 葉 そ 度 の 手
え や 価 に う の 人 の
る 値 紡 し 人 心 の
よ 値 う 生 は 結 奥
う を ぐ た 來 は 未 深
に あ こ と 來 ま く に
な ら と 事 ま く に
つ ゆ で 、 や ま く に
た る 、 や ま く に
た る 。 角 自 感 で

（以上百五十字）

第一問

一塁までの道のりはソフトボールで慣れ親しんだはずだが、野球場ではその長さの違いに驚き、硬式野球に正統性のようなものを感じているというもの。長

問二

エ

問三

ボールの大きさが違うだけなのに、自分の身体感覚ではしつかりとグラブに入つたはずのボールがその中にはないことに気づき、ことの意外さに動搖している。

問一

エ

ボーラーの大きさが違うだけなのに、自分の身体感覚ではしつかりとグラブに入つたはずのボールがその中にはないことに気づき、ことの意外さに動搖している。

問四

1 通過儀礼

ソフトボールをやつてきたという経験が同じだということ。

問五

2 「私」にノックを浴びせてボールを追わせることで、「私」の体にしみついたソフトボール選手としての体つきと身ごなしを剥がしとり、硬式野球に適応した体と身ごなしに変わるという自覚を持たせること。

第三問

（以上百字）

問六

（以上六十字）

問一

一人暮らしの高齢の祖母は、奥の方にあるものは滅多に取り出すことがないため、祖母の娘である母以外には要領を得ず、不気味ささえ感じさせる状態。

問二

フェミニズムの視点から家族内の性別役割分担に違和感を持ちながらも、家族の中でそうした意識に基づいた言動ができない点。

問三

自分が本当に思っていることを言葉にして相手に伝え、相手もその言葉を受け止めて自身の考えを話すことで互いを理解すること。

問四

（以上六十字）

問五

ほとんど異文化といつてよいほど、家庭として共同生活が成立しているから。互理解を試みることもなく、家族として共同生活が成立しているから。

価値観の違いを言葉にしていったずらに家族の日常に波風を立てるよりも、家族全員が日常を元気で過ごすことを最も大切にする考え方。